
適当人間の学園生活

グリーンわさび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

適当人間の学園生活

【Nコード】

N0580W

【作者名】

グリーンわさび

【あらすじ】

マイペースで適当人間と言われる主人公と、その友達2人をメインに繰り広げる学園物語。

登場人物紹介

登場人物紹介

適田力当 てきだ・りきと 身長173。眼鏡はかけておらず。

外見はごく普通だが、ちょっと紳士的に見られることも。

学業の成績は悪くなく、特別良くもない。運動神経は割と良い。

適当人間と言われる程、適当な所がある。

「こいつの心は超合金」とよく言われる。

佐藤一郎 さとう・いちろう 身長158cm。眼鏡はかけておらず。

外見は子供っぽい。勉強の方はダメダメ。運動神経はかなり良い。
基本的にテンションが常に高いが、不機嫌になるとすぐ顔に出る。
少し短気。

気合いを入れるときの声は「オツシヤア！」

注射が大嫌いで、予防注射の時断末魔が聞こえたらそれは一郎の声
と言われている。

力当を「リツキー」と呼ぶ。

氷川涼一 ひかわ・りょういち 身長182cm。眼鏡はかけておらず。

クールな二枚目って感じな外見。勉強、運動共に上位。優等生。

適田、佐藤と三人で遊ぶ時、大体この男が主催となる。

普通の遊びは飽きた！と言って、変な企画を思いついてはそれを実

行する。

一部の企画は映像として残っている。
力当を「リキト」と呼ぶ。

光明院怜子 こうみょういん・れいこ 身長159cm 眼鏡はかけておらず。

お嬢ちゃん。綺麗な人というよりは、可愛らしいという感じ。

勉強、運動共にトップクラス。一時はトップに君臨していたことも。何の事情かは知らないが、かなり荒れている。

しかし髪を染めたり、ピアスを付けたり、なんてことはしてない模様。

水無瀬楓 みなせ・かえで 身長162cm 眼鏡着用。

適田のクラスの委員長を務める。お下げに眼鏡という優等生っぽい雰囲気を出している。

現在学年トップを独占している。勉強しか出来なさそうな見た目だが、運動神経抜群。

陰では「冷血女」と言われるくらい、ひんやりしたお方。

彼女に睨まれたら凍ると言われるくらい、威圧があるお方。

追加はあるかもしれない。

登場人物紹介（後書き）

今の所この5人です。多分、後から追加すると思います。

はじまりはじまり（前書き）

さあて本編開始です。

はじまりはじまり

やあ、皆さん。僕の名前は適田力当。てきだ・りきと高校2年生。
多分この物語の主人公だ。身長は173cm。特に言うこともない
普通の身長だね。

視力は両方とも1.5。これもまた特に言うこと無いなあ。

好きな食べ物はカレーライスで、口に入れたくない物は砂かな。

あ、カレーはね、どっちかっていうと辛口が好きだよ。

友達からは適当人間ってよく言われるよ。うーん、まあ、そうかも
なあ。

でも分かんないや。

さて、自己紹介も終えたところで今僕は学校に向かう途中なんだ。
徒歩で20分くらい。後は特に言うことないや。

「おはようさん！ リッキー！」

早速現れたこのやや小柄な男子は佐藤一郎。さとう・いちろう

リッキーっていうのは僕のあだ名ってやつだ。りきとだからリッキ
ー。そのまんまだね。

一郎はスポーツが得意で、勉強はちよつと苦手みたいだ。
基本的に常にテンションが高いよ。

「うーす」

そして次に現れたこの背が高い男子は氷川涼一。ひかわ・りょういち

クールな男子で頭脳明晰、そして運動神経抜群。いやあ、素晴らし
い成績をお持ちですよ、この人は。優等生ってやつですな。しかも
顔も二枚目。うらやましい。

僕はこの2人といつも交流をしてるんだ。休みの日とかも、3人で

わいわいやってるよ。

んで話は戻り、「昨日の番組面白かったなー」みたいな会話をして、ついに我らが通う高校に到着した。

さあ、問題はここからだ。

いつものように教室の扉を開けて入る。

クスクスクス。

うーむ、今日も聞こえるなあ。陰で笑う声。
僕の使っている机に着くと……

あ、やっぱり。

机にはびつしりと、これでもかこれでもかというくらいの落書きがあつた。

いやはやご苦労なことですな。

しかも油性ペンで書いているじゃないか。こんな落書きにわざわざ油性ペンかあ。

何だかもつたいたい気がする。僕だったら鉛筆かな。

油性だと消すの面倒なんだよ。除光液使わないといけないからなあ。まあ消すのは書かれる人だから書く人たちには関係のないことか。

「おー、びつしり書かれてるじゃないか」

氷川が呟く。氷川の席は僕の右隣だ。氷川はバッグを机の横に付ける。

さほど落書きに興味を示していないように見えた。

僕はバッグを机の上に置き、チャックを開けて教科書を取り出し、机の中に入れた。おや、机の中は特に何もされていないようだ。そうか、そうか。落書きだけか。

「相も変わらずだなあ」

呆れたように一郎が言って、僕の場所から左斜め上にある席に着いた。

うゝむ、どうやら一郎は少し怒ってるようだ。彼はすぐ顔に出る。

「机に落書き、か」

氷川がつまらなそうに言う。彼はもっと派手なものを期待していたのだろうか。

「まだ始まったばかりじゃないか。これはまだ前菜なんだよ」と僕は返した。

とまあ、皆さん。僕は学校でこんな感じなんだよ。そう、いじめられているんだ。

実はというと僕は転校生で、一ヶ月前の五月に転校してきたんだ。いじめが始まったのはたしか一週間くらい前だったかなあ。多分そんなくらいだ。

もう毎日こういった嫌がらせをされているわけだ。困ったもんだよ。色んな嫌がらせをしてくるし、すごいよホント。

一郎と氷川は僕ほどの嫌がらせは受けないけど、悪口とかは結構言われているみたいだ。

僕たち三人はこれらの嫌がらせをネタにして楽しむことで、いじめる奴らに対抗して居るんだ。

正直色んな工夫してくるから、

今日はどういった嫌がらせだろうと気になっている僕が居る。

一体何ヶ月やってくるんだろうか。それとも卒業までずっとかな？
まあ取りあえず、お話は始まったばかり。いじめも始まったばかり。
まだまだ続くだろう。

では次回、この落書きをメインに話を展開するよ。

一つ一つの落書きについて、僕と、佐藤一郎、氷川涼一の三人がトークするよ。

後、いじめの主犯格も出てくるよ。それでは、またお会いしましょう。

はじまりはじまり（後書き）

いきなりこんなスタートとなりました。
基本的にギャグです。

机の落書き（前書き）

びっしり書かれた落書き。

誹謗中傷の言葉の中に潜む謎の言葉。

そして現る主犯格。

机の落書き

まだ朝のHRも始まっていない時間。

さっきの陰口や笑っていた生徒は、今は友達と普通に談笑しているようだ。

「どれ、一つ一つの落書きについて話していこうじゃないか」

氷川が2人に言った。

「よし。どれからにする？」

適田が答え、机の上に置いていたバグを横にかけた。

一郎も「OK」と反応した。先ほどは不機嫌そうな表情だったが、今は元のテンションに戻っているようだ。
早速落書きのトークが始まった。

「まずはこの落書きだ」

氷川は左上に書かれている落書きを指して言った。顔を少し近づける適田と一郎。

お前のチン。たんしょー

3人がどつと笑う。

まさかアソコの大きさを悪口として書いてくるとは。

「おいおい、たしか銭湯行ったとき俺リキトのアソコ見たけどな、ちっちゃくはなかったぞ？」

氷川が笑いをこらえながら言った。

適田は笑いながらその言葉に反応する。

「ちょっと待てよ。クラスメイトいるんだぞ？」

「良いじゃないか。アソコの大きさだぞ？こんなもん人それぞれだろうが。」

これ書いた奴はあれか？ チン。でかい奴はえらいと思ってんのか？」

氷川は完全に笑いのつぼにはまっているようだ。体を震わせながら言っている。

一郎は笑って話すことも出来なかったが、少し収まりやっと口を開いた。

「そついや日本史でチン。でかい人いたよな？ 俺記憶にあるぞ」

「道鏡とかいうお坊さんの事かな。まあ一説に過ぎないけどよくアソコでかいつて言われてるよね」

「ハッハッハ、いやー、アッハッハッハッハ……」

氷川の爆笑が中々止まらない。普段クールなのに、ここまで笑うのも珍しい。

彼にとってこの落書きはさぞや凄まじいインパクトがあつたのだろう。

確かに「死ね」や「バーカ」等と比べると、一線を画するものがあるかもしれない。

「ハッハッハ……これ、今まで見た落書きでは初めてだな」
「そういやそうだね。まさかこんな、アソコの大きさを悪口として
言ってくるなんてなあ。」

友達のアソコ小さかったらどうするんだろうか」

「もうリッキーへの悪口が思いつかなかったんだろっな！」

落書きに関しては、これで3度目だ。しかし、最初の落書きと2度
目の落書きは

死ぬ、バーカ、出て行け、なんていうありきたりな言葉で、トーク
もさほど盛り上がらなかった。

とりあえず、この落書きについてのトークはお終いだ。

では次の落書きに行ってみよう。氷川が指したのは真ん中にでかで
かと書かれている落書きだ。

中々力の入った落書きだった。

クソ坊主！！！！

またもや3人がどつと笑った。クソ坊主。たしかに悪口だ。

しかし、わざわざ真ん中にでかでかと書くものなんだろうか。

そして3人が一番笑ったのは字体だ。何と、楷書体で書かれている
のだ。

楷書体で、でかでかと机の真ん中に「クソ坊主！！！！」。

3人はこの落書きのインパクトの強さに屈し、爆笑してしまったよ
うだ。

一郎が一番笑っていた。

「こりゃーどういうこった？ クソ坊主……！ クククツツ、クソ坊主……！！」

もう笑いで何て言ったらいいのかわからない状態になっている一郎。

「これ楷書体って所がツボだよな。しかもちゃんと綺麗に書かれてるって所がな、もう最高だ。

百点だ！ 百点だよこの落書きには！ 残して置きたいくらいだわ！」

氷川もこの落書きを絶賛した。

「僕も百点！ この落書きには。僕が思うに、今まで見た落書きの中では一番クオリティ高いねこれ。もうお見事！ と。僕は言いたい」

後の落書きはありきたりな奴ばかりだった。

今回の落書きに関してはクオリティの高さが飛躍的に上昇した。特にクソ坊主の高さは現時点で最高だ。これを越える落書きが、果たして現れるのだろうか。

おそらくこの嫌がらせはまたしてくるはず。その時に期待をしたい。3人はそう思った。

トークで盛り上がった後3人は普通に談笑し、楽しんでいた。

落書きに関しては、クソ坊主……！！は氷川が携帯で写真を撮り、ちゃんと保存しておくようだ。

他愛もない会話を続けている中、

がらっ

と一人の女子が入ってきた。談笑していた3人の視線が彼女に向かう。

彼女は光明院怜子。（こうみょういん・れいこ） 外見は可愛らしく、愛嬌のある顔をしている。

成績も優秀で、一時は学年トップにいたくらいだ。現在は別の生徒がトップを独占しているらしい。

家も裕福でいわゆるお嬢様という奴だ。

でも実家が金持ちだからといって傲慢という訳ではなく、明るく、優しく、クラスでも中心的な存在で、男女問わず人気がある。

というのが表の顔。

実は適田へのいじめの主犯格で、全ての嫌がらせを考え、指示してきた生徒だ。

主犯とすぐ分かったのは、彼女を中心に数人の男女が集まり、3人のことを話しているのを3人が目撃し、聞いたからだ。

あれこれ彼女が色々嫌がらせの手段を話していた。

隠れてやるつもりはないようだった。

それにしても、どうも彼女は荒れているようで、3人に見せる彼女の顔は負の感情に満ちている。

一体どうしたというのだろうか。

一郎と氷川は1年生の頃、クラスが違い接したことも無かったが、彼女を知っていた。

氷川は「あんなんじゃないや無かった気がするなあ」と言っている。少なくとも、1年生の頃は彼女に関する悪い噂は聞かなかったようだ。

しかし一郎も氷川も、「俺が知らないだけかもしれないけどな」と言った。

まあ何にせよこの生徒によって、素晴らしいクオリティの落書きが生まれた、ということ間違いないだろう。

「落書きのクオリティが上がったじゃないか。お嬢さん」

氷川が光明院に言った。彼女は何も言わず、冷たい視線だけを向けた。

「ほー、冷てえなあ。暑い夏には持ってこいだぜ」

氷川は挑発的な冷たい視線にも動じず、おちゃらけてみせた。

光明院の友達と思われる女子が「きもっ」と言ったのが聞こえた。

彼女は友達に対してだとアイドル並の可愛い笑顔を見せる。これがまた愛くるしい笑顔だ。

さつき見せたあの冷たい表情とは正反対。暖かい笑顔だ。

適田は顔の使い分けに感心した。

「いやあすごい笑顔。あんな顔を僕たちに向けたことがあったらどうか。

人間って、すごいね」

「全くだ。あの表情の差には驚かされるわい」

「リッキー、正直あの顔可愛いと思っただろ？」

「当たり前じゃないか。あの顔は正直に可愛いと言わざるを得ない

って」

では、この話はこの辺で終わりに致しますか。

次回は、怖い氷の委員長が現れます。光明院さんの冷たい視線を越える、冷たい視線ですよ。

それでは、またお会いしましょう。さよなら、さよなら、さよなら。

机の落書き（後書き）

過ぎたるは及ばざるがごとし。

それは、アソコの大きさにも言えることではないでしょうか。

氷の委員長（前書き）

除光液を借りに行くと、何やらトラブルが。

氷の委員長

落書きトークから時間は経過し、今は昼飯タイム。

机を寄せ合って食べる女子、すでに食べ終わり遊んでいる男子と、教室はにぎやかだ。

そんな中、3人は適田の机で昼飯を談笑しながら食べていた。

あの「クソ坊主!!!」という落書きは彼らの脳裏に焼き付いたらしく、それを話題にしている。

「ごちそうさんでした。さて、職員室に行くかな。」

一番最初に食べ終わったのは適田だ。すっと立ち上がった。氷川が尋ねる。

「除光液か？」

「イエス。」

「よし、俺らも行くか。」

「リッキー一人だったら危ないからな！」

「心強いガードマンですなあ。」

こうして3人で職員室に行くことに。

廊下で立ち話をしているクラスメイトは3人に向かって何やらヒソヒソ話をしている。

こんなことも当たり前。無かった事がないくらいだ。

ん？僕がゴミだって？ハッハッハ、きつついなあ。

でも僕がゴミだとしたら、彼女らは空き瓶とかにも陰口を言ったり笑ったりするのか。

まあ「それはそれ、これはこれ」と言うんだろうけども。これ便利な言葉だなあ。

さて職員室に到着し、我らの担任。担当科目は数学の林先生の所に着いた。

林先生はのんびりとイスに座り、お茶を飲んでいた。

「どもー、先生。適田です。」

「お、リキト君か。除光液か？」

「はい。」

「全くあいつらもなあ。先生、あいつらに何度も言ってるはずなんだが。」

「お前、大丈夫か？」

「これが全く大丈夫でして。あ、でもこの前下痢しましたよ。」

でも原因が氷水の一気のみでしたからね。特に何とも思わないんですよね。」

あの嫌がらせには。自分でも不思議に思うくらいで。」

「あいつらも一体何でこんな事を……。お前ら、何も心当たり無いんだろ？」

「無いんですよ。ミステリーですよホントに。」

「お前の心はホント超合金かと思うぞ。とりあえず、本当に耐えられなくなったら」

先生に言えよ。」

「はい、分かりました。」

「その様子だと本当にケロッとしているな。ほれ、除光液。もうそれやるよ。」

どうせまたしてくるんだろうから。」

「あ、良いんですか。ありがとうございます。それじゃ。」

「おう。」

職員室から出ると、氷川が話しかけた。

「おい、ちょっとあれ見てみ。」

「ん……、？おや、光明院さん一味じゃないか。どうしたの？」

「氷の委員長とトラブってるみたいだな。」

「相変わらず怖いぜあの委員長は……。」

一郎が怖がる氷の委員長とは、現在学年トップを独占している水無みなせ・かえて瀬楓のことだ。お下げに眼鏡といういかにも優等生らしい外見で、事実優等生だ。

勉強しかできない子と思われがちだが、運動神経も抜群で、体力測定では女子中最強とまで言われているほど。

性格はとっても真面目で氷川以上にクール。「あれはクールじゃない。アイスだ。」

と氷川は言う。睨まれたら凍ると言われるほど威圧があり、前回の光明院の冷たい視線以上に冷たい視線を放つ。

余りしゃべっているところを見かけず、読書している所をよく見るが、友達はいるようだ。

そんな彼女は今光明院らと口論をしている。

どうやらあの落書きについて、水無瀬が抗議したようだ。

周りには野次馬が集まっている。

水無瀬はズバツと言う。故に反感を買うことも多く、陰では「冷血女」とまで言われる。

「あんな下らないこととして面白い？お嬢様のくせに随分と低俗な趣味をお持ちね。」

「私が指示したと、誰が言ったのかしら。」

バチバチと火花を散らしている。光明院の取り巻きの女子は「うざい」などの

野次を言うことしか出来ず、そんな野次には聞く耳も持たない水無

瀬。

「戻るか。」

「そうだね。」

「ほえー、女って怖いなあ。」

3人はそそくさと教室へ帰った。

廊下で立ち話をしていた生徒は先ほどの鬨いを見に行っていて、一人もいなかった。

教室に戻ると、クラスメイトの話題はやっぱりさっきの口論だ。

一方3人はポケットティッシュを出し、除光液をつけて机の洗浄を開始した。

「氷の委員長怖いね。僕も初めて目があったときはちょっとびくつとなっていましたな。」

「だろ？男子ですらあの女相手だと怯むからな。」

「リッキー、でもあの結構美人さんなんだぜ。」

「ん！それは僕も思った。あの綺麗な顔立ちだよな。こう、美人だよな。」

「お前らも思ってたのか。実は俺もなんだ。」

だいぶ汚れも落ちた頃、突然水無瀬がやってきて適田に話しかけた。

「ちょっと、適田君。」

「おや、水無瀬さん。どうしたんだい？」

「あなた、1週間もこんなような嫌がらせされて何も思わないの？」

「先生にも同じ事聞かれたなあ。正直に言っと、特に何も思わないんだ。これが。」

「いやあこんなもんだよなって受け止めて、そこで終わっちゃうんだよね。」

僕自身も変だと思ってるよ。」

「……ふーん。」

「安心しろ。俺たちは俺たちで楽しんでるわい。それにあんなクオリティの高い落書きを見せてもらったんだしな。」

「クオリティの高い落書き？」

「ほれ、これだ。」

氷川の携帯画面に映る堂々と楷書体で書かれた「クソ坊主!!!」の落書き。

誰が書いたのかは分からないが、とても力強さを感じる。

「随分と凝ってるわね。」

「そうだろ。これの衝撃度は半端じゃなかったな。」

「そうだね。今までの落書きとは全く別のものだねこれは。」

側で一郎が笑っている。水無瀬は少なくとも今の所は適田があれば嫌がらせで

落ち込んだり悩んだりはしてないと判断し、少しホッとしたような表情を見せた。

「まあ、本当に嫌と思ったらビシツと言いなさい。今は楽しんでるみたいだから

大丈夫そうね。それじゃ。」

「ご心配かけてすまないね。水無瀬さん。」

「謝る必要はないわ。」

水無瀬は自分の席に戻っていった。

適田は少しホッとした。彼女のような人もいるんだなあと。

ふと廊下側見ると、ドアが開ききっていて、

そこから光明院らが立ち話をしているのが見えた。

水無瀬との口論を愚痴っているんだろうかと思っていると、あちゃー、目が合ってしまった。相変わらずの冷たい視線だ。あーら。こりゃ話題が僕に切り替わってしまったかな。

次回、怪奇現象起こります。
ではまた。グッバイ！

氷の委員長（後書き）

主人公達に対しては氷じゃない気がする。
でも光明院さんらにはとつても氷です。

ない！（前書き）

怪奇現象が起こります。

ない！

落書きも消し終わり、次の5時間目は体育なのでジャージに着替える3人。

「僕はね、予言するよ」

突然適田が言った。すかさず「何を？」と返す氷川。

「5、6時間目の体育が終わったとき、僕の所持物が一部消えるという

怪奇現象が起こることを、僕は予言する」

「リッキーの？」

「その通り。僕のリュックごと無くなっている。なーんてこともあり得ると思うんだ」

「それは俺も思っとる。多分九分九厘、怪奇現象は起こるぞ」

「でもリッキーの怪奇現象ってたしかいじめ開始3日目の時起こらなかったか？ あの時はいじめ箱にワープしてたよな」

「あんな分かりやすいの怪奇現象と言えないな。もっとなんてでもない所はないと」

「でも僕が思うに、物が消えるだけとは限らないと思ってるんだ。

たとえば、教科書がびりびりに引き裂かれていたりとか……」

「切り裂きジャック、教科書バージョンか。それもあり得るかもしれないね」

「まあでもリッキー。大丈夫だって！ さすがに物ぶっ壊すってことはないんじゃない」

「そうだね、出来れば僕としては何も起こらないで欲しい」

体育終了。教室に戻る3人。

「!!!!」

3人が驚愕の表情を見せる。一番最初に開口したのは適田だった。

「ない！ 机ごと、ない！」

「前代未聞だぜこりやあ……。机ごと消し去るとはな」

「リッキー、俺隣から飯の机持ってくるわ」

「ありがとう！ 頼む！ 僕はちよつと探すよ」

「こつというのは大体窓からポーンとな……」

窓から下を見る適田と氷川。高い。何せ、ここは3階だからだ。

「ん？ 無いな。リキト、お前の物らしき物はあるか？」

「どこにも見あたらないな……」

「ほー。つまり校内に隠したわけだな。よっしゃ、放課後探すか！」

「そうだね、これは面白くなってきたなあ」

かつて机があつた力当の所へ戻る。数秒後、机とイスを持ってきた一郎が入ってきた。

「よいしょつと。ほれリッキー」

「スペシャルサックスだ一郎！」

妙にテンションが上がっている適田であつた。

放課後。

「さて、消えたリキトの物達を探すか」

「リッキーの物が机ごと消えるなんてな……」

「僕は驚愕したよ。僕の所だけ『無』の空間になってるからね」

「ホントだよな。お花畑の中にポツカリ何も生えてない所があるよ
うな感じだわ。」

こりゃあ、リキトのバッグから教科書まで全部見つけるってのは相
当時間がかかりそうだな」

「覚悟しないとね。僕はやる気満々だよ。今かなりテンションが上
がってきてるからね」

「ウツシャア！ あ行くか！」

力当の消えた物一覧

- ・机とイス
- ・国語の教科書とノート
- ・数学の教科書とノート
- ・英語の教科書とノート
- ・物理の教科書とノート
- ・筆箱
- ・バッグ
- ・弁当箱

唯一今ある物はジャージが入った袋。体育の授業中、この袋だけは
消えなかったようだ。

こうして、3人の「適田力当君の消えた物探しの旅」が始まったのである。

まずは3階にある全ての部屋を見ることにした。

もちろん、一番最初はこの教室、2年B組だ。

ゴミ箱、教卓の中、掃除用具箱のすき間、と色々探し回ったが、どうやらこの教室にはないみたいだ。すぐ見つかるような所には隠していないという事だ。

「やっぱりすぐ見つかるような所には隠さないって事だな。

リキト、こりやあかなり時間かかるわ。下手すりゃ晩までここに居ることになる」

「面白いじゃないか。僕はわくわくしてるよ」

「リッキー本当に大丈夫なのか？」

「もちろんさ。予言が当たったんだよ。これは嬉しいね。初めてだなこんなの」

次に、A組、C組と探す。少々変な目で見られたが、一部の生徒は隠されたんだな、と察したようだ。B組の時と同じく隠してそうなポジションを探す
が……。

無い。

しかも、空き教室に入って探してみたが、やっぱり無い。

どうやら今回はかなり見つけにくい所に隠したと思われる。

ただ、校外に隠したという可能性は0に近いというのは分かる。

昼休みの時教室で着替えていたが、その時はもちろん机もバッグもあつた。

さらに時間ぎりぎりに出たので、3人が出る頃には教室には3人しか居なかった。

しかも体育館に到着したとき、後から体育館にやって来た生徒は居なかった。

3人が最後だったのだ。

5と6時間目の間の休み時間を使って複数の生徒が隠した、というのは間違いないだろう。

休み時間は10分。10分の間に光明院らが机ごとどこかに隠してしまったのだ。

あらかじめ隠す場所を決めておいたのだろうか？それは分からないが。

何にせよ、3人は3階の全教室のゴミ箱、すき間、教卓の中を探したが、見つからなかった。再びB組に戻り休んでいるとき、あの氷の委員長、水無瀬がやってきた。

「どうしたの？さっきから色んな所行ってるみたいだけど」

「いやあ実はね水無瀬さん……」

適田が事情を話す。

「全く面倒な人たちね。私も手伝わせてもらって良い？」

「スペシャルサックスだよ水無瀬さん」

こうして氷の委員長が加わった。

適田は散々陰では「冷血女」とか言われてるけど、温かい人だなあと思った。

今回は氷の委員長を加えたメンバーで消えた適田の机達を探しませっせ。

果たして全て見つけることは出来るのか？
では次回お会いしましょう、グッバイ！

ない！（後書き）

私の部屋では高確率でリモコンが消えます。

探索（前書き）

委員長も含め、探すことになった4人。

探索

「5と6時間目の間の休み時間に隠されたというのは間違いないわね」

「そういうことだね。僕もまさかこんなに見つからないとは思ってもみなかった」

「今回はかなり考えてるな。隠す方も」

「それにしたってこうまで見つからないもんなか？ このまんまじゃホントにリッキーの物がジャージしか無くなっちゃうよ」

かつて適田の机や物があつたところで会話する4人。

時刻は4時過ぎになった。クラスメイトはいない。帰ったか、部活に行つたかだろう。

まあその方が探しやすいものだ。

「取りあえず、10分の休みしか無いんだから、鍵がかかっている教室に隠すつていうのはまず無いと思うわ。やっぱり、教室でしょね」

「一応、僕たちはここの階にある全部の教室見てみたよ」

「ゴミ箱、教卓の下、色々なすき間、でしょ？ まだ見るところがあるんじゃない？」

「机の中があつたな。そーいや」

「その通りよ氷川君。少なくとも教科書とノートはあるはずね」

「ウッシャア！ じゃあ全教室の机、探してみっか！」

すると何とまあ、あつさりと。そろそろと発見され始めた。

B組には無かったが、A組、C組には2冊ずつ全ての教科書。

空き教室の机の山の中からはノートが3冊発見された。

さらには適田の机とイスも発見された。一気に見つかった。

10分しかないからだろうか。隠す方もあらかじめ場所を決めていたんだろうけども、

机の山に隠すので大幅に時間を使ってしまったか。

しかし、バッグと後一冊の物理のノート、筆箱と弁当箱がまだ見つからなかった。

「後4つね」

「すごいなあ、委員長のおかげで一気に見つかったよ。本当にありがとう！」

「礼には及ばないわ」

適田は水無瀬に感謝を言う。内心ちよつと焦っていた。

しかし、この調子だと残りの4つも見つかるのではないか。そう思った。

そう思うと見つからなくなるのではないか、と少し心配したが、なんとバッグ、弁当箱、物理のノートが立て続けに発見された。

バッグは空き教室の掃除用具箱内にあるバケツの中、

弁当箱はA組の掃除用具箱内にあるバケツの中、

物理のノートはC組教室にはられていた薬物乱用禁止ポスターの裏から発見された。

いよいよ残りは筆箱となった。

「すごいなあ、後筆箱だけになっちゃったよ」

「後は筆箱だけね」

さて、残り一つの筆箱となった。

ところが、筆箱だけがどこを探しても無い。

今度は本当にどこを探しても無かった。
まさか筆箱が最後の難関になるとは。

「おつかしいなあ。僕の筆箱、あれ何年も使ってきた良き相棒なのに……」

「この階の教室全てを見てみたけど、無かったわね」

「そっぴゃ3階以外まだ探してないんじゃない？」

一郎が言う1階と2階。しかし、2階には3年生教室と職員室、生徒指導室、といった隠すのには向いていない部屋がたくさんある階だ。

一方1階も隠すところが玄関やゴミ箱ぐらいしかない。

4階に至っては実験室、音楽室、コンピュータルーム、美術室といった普段は鍵がかかっている教室ばかり。仮に開いているとしても中に人がいるので、隠す場所としては適さない。

可能性は低いものの、それでもないとは言えないので探してみることにした。

が、見つからなかった。

時刻は6時を過ぎた。そろそろ4人は疲れ始めていた。

B組の教室に戻り、再び適田のところで話す。

「見つからないね。駄目かな、長年使ってきた相棒だけど、もう探

すところがないよ」

「……さすがにもうな、探すところが無いんじゃない」

「すまねえリッキー……」

「もう、すべてを見たものね。……こればかりは、駄目かしら」

1～4階のあらゆる所を見てきた。しかし、見つからなかった。
あきらめムードになっている中、突然

「あああああ—————つつつ！！！！！！！！」

一郎が叫んだ。

いきなりの叫び声に驚く3人。氷川が思わず聞く。

「どうした一郎？」

「あれ！！！！！！」

一郎が指差す。その方向には……黒板の上にあるスピーカー。
まだ3人は分からないようで、再び氷川が聞く。

「スピーカーじゃないか。それがどうした？」

「上！！！！」

スピーカーの上をしてみる。すると、3人も驚愕の表情になった。

スピーカーの上にあったのだ。筆箱が。

「おい、あんな所に……ハッハッハッハッハ……！！！！」

「これは予想してなかったなあ……ダメだ、笑ってしまうこれは」

全く予想外なところにあったことに、適田と氷川は爆笑した。

一郎もそれにつられて爆笑し、水無瀬も思わずクスツと笑った。

こうして最後の消えた力当の物、筆箱が発見され午後3時半ごろから開始したこの物探しはおよそ2時間半後の6時過ぎに終了となった。

下校での会話。

「それにしてもだ。リキト」

「ん？」

氷川が適田に尋ねる。

「やけに手が込んでると思わんか？ いや、10分しかないからそりゃ教科書とノートみたいにすぐ見つかるのもあったけども。物理のノート、机とイスのような隠し方は少し巧妙だと思っんだ」

「そうだねえ、たかが物隠すだけにしては少し僕も手が込んでると

思ったよ」

「面白がってるだけの人とかもいるんじゃないかしら」

水無瀬の言葉に少し興味を持つ3人。

「あなたたちが楽しんでいるように、向こうにも楽しんでいる人がいるんじゃない？ あなたたちの事が好き嫌い関係なく」

「ああ、それもあるかもしれないね。でも、光明院さんの周りの人って、みんな僕のこと嫌ってるんじゃないの？」

「それはどうかしらね」

「光明院がリキトに対してああも嫌悪を抱くつても少しおかしいしな。ああも激しく嫌悪してるのは光明院だけかもな」

「それにしても、どうして僕はああも光明院さんに嫌われてるんだろう？」

「彼女には何かあるんでしょうね」

「リキトには心当たりが無いんだからな」

「僕は分からないなあ、あの人のことは……」

まあ何にせよすべて見つかってよかった。

しかも傷つけられたり、落書きされたりなんてことも無かった。

ただ隠されただけだったのだ。

ひよつとしたら水無瀬さんの言うとおり、ただ楽しんでいるだけの人がいるんだろうか。

分からないけども、とりあえず今は見つかってよかったという気持ちに浸ることにした。

次回、色々あった金曜日が終わり、休日となる。

3人は氷川の家で泊まることに。

そこで氷川は企画を持ち出す……
果たしてどんな企画が行われるのか！？
ではまたお会いしましょう！

探索（後書き）

リモコン探すのにあらゆる所を探しましたが、見つからず。
あきらめかけていると、なんと掛け布団の中がありました。
数十分かかりました。

企画発表（前書き）

まだ2回しか企画をやっていないものの、
学校での嫌がらせを超える苦痛となる氷川の企画。
3回目となるが、果たしてその企画内容は。

企画発表

机に落書きされたり、机ごと消えるという怪奇現象にあったり、色々あった金曜日にも終わり今は土曜日。休日だ。

適田は前日の夜、氷川から電話で「明日、一郎も入れて3人で俺の家で遊ぼうや」とあり、

その家に行く準備をしていた。ちなみに一泊する予定だ。

転校してまだ一ヶ月ちょいだけど、氷川と一郎の3人でかなり遊んだ。

大体氷川の家で遊ぶ。氷川は遊ぶたび遊ぶたび何か企画を考えており、

それを3人で実行する。たまに本当に無茶な企画をやるうとしたこともあり、

適田が一番無茶だと思ったのは「車で1時間かかる隣町を自転車で行こう」というものだった。

行こうと言いだしたのは何と夜中の2時。結局それは却下され、普通に寝た。

実行した中で一番きついと思ったのは、「ロイヤルストレートフラッシュとフォー・オブ・ア・カインドが出るまでポーカーをやる」というもので、

土曜の午後2時から開始して翌日の午後6時40分頃にやっとロイヤルが出て終了した。

フォーは結局出なかったが、もう眠ることなくずっとやって疲労していたので「もうダメ」となったのだ。

地獄だった。ひたすらずっと3人でポーカーをやり続けるのだ。

ひたすら狙った役が出るまで同じゲームを繰り返す。

夜中には一郎のテンションが壊れてしまい支離滅裂なことを言っていた。

その一郎がロイヤルを出したときは、歓喜の余り3人のテンションが崩壊した。

あの企画は映像として氷川のパソコンに保存されている。

はたして、今回はどんな企画が待ち受けているというのか。

そんなことを考えつつ、適田は家を出た。

しばらく歩き、氷川の家になると、一郎が歩いているのに気づく。

一郎も適田に気づいたようだ。

「よーっすりッキー」

「おはよう」

「さて、また氷川の家で遊ぶことになったけど、今度はどんな企画を考えてやがるんだろうな？」

「うゝむ、分からないけどポーカーはもうやめてほしいな」

「ありゃあホントに地獄だったな！二度とやりたくねえやあんなの」

「僕も。はつきりいつて学校での嫌がらせより苦痛だったなアレは」
「ハハハ！いやあそうかもしんねえな。ホントあいつも何考えてんだかな？何だっけ？何か夜中に自転車で隣町行こうぜとか言い出してたな！」

「あれはさすがにやめてくれって僕と一郎でお願いして中止になったんだよね」

「冗談じゃないってんだよ全く。補導されちまうわい」

そんな会話を続けて歩いていると、いよいよ氷川の家が見えてきた。

「見えてきたな、さあてどんな企画が俺たちを待ちかまえているのやら」

「昨日の物探しで少し疲れが残ってるから、ちょっとソフトな企画

が良いな」

適田がインターホンを鳴らす。ドタドタ、と階段を下りる音が聞こえ、ガチャッと扉が開いた。ニヤニヤした氷川が出てきた。

「らっしやい！」

「何がらっしやいだこの野郎。ニヤニヤしやがって。今度は何の企画だ？」

「ん？ それは後だ。まあ取りあえず上がってくれ」

「おじゃましーす」と言って家に入る二人。そして、あの部屋へと向かう。

階段を上ったすぐ正面に、氷川の部屋のドアがある。

ドアにはなぜか一時停止と書かれたシールが貼ってある。

氷川がドアを開け、二人は部屋に入った。氷川ルームは割と片づいていて、物が散乱していない。一郎の時とは大違いだ。学校帰り一郎の家で遊んだが、一郎の部屋はもうそりゃあ凄かったのだ。言葉で表現ができない。「、？>#\$'<&）」^¥「；（@！」「つてくらいひどい部屋だった。少し片づけた記憶がある。

「さて、まあ言うまでもないが」

氷川が口を開く。やっぱり、といった反応をする二人。

「企画を考えたぞ」

「今度はなんだよ？ 頼むからポーカーはやめてくれ！ 俺はもう勘弁だ！」

「安心せい。今度はカードゲームじゃないからな」

「良かった」。今度はフォー・オブ・ア・カインド出すまでやるとか言いそうだからね」

「そうだな、まああれは一時保留って事で」

「保留！？ お前いつかまたあれやろうってのか！？」

「何言ってるんだお前。ホントはロイヤルと一緒に出すってのが目的だったんだぞ？」

「お前……夜中俺壊れたろ！？ あんななるんだぞ！？」

「僕もきつついな、アレは。正直ここ一年ポーカーやらなくても良いんじゃないかと思ってる」

「なに、数ヶ月も経てばやりたくなるさ。その時だな」

「嫌だ！」

思わず声が重なる二人。

「まあそんな訳で、今回の企画を発表するぞ」

黙る二人。

「今回の企画は……」

「隣町まで自転車で行くぞ」

二人は固まった。

企画発表（後書き）

葛飾区から羽田空港まで自転車で行った友人がいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0580w/>

適当人間の学園生活

2011年10月9日10時24分発行